



横浜FC泉ジュニアユースの監督を務める屋良充紀が育成の現場に改革をもたらす

南米のクラブでプレフベニール（15～17歳）の指導を経験した屋良充紀。現在はその経験を生かし、横浜FC泉ジュニアユースの監督として活躍している。独自のスタイルで育成の現場に立つ、異色の指導者をレポートする。

取材・文●五十嵐創（本誌編集部） 写真●田川秀之（本誌写真部）

13個目のクラブで合格
動き始めたサッカー人生

「チームメイトがセルジーニヨでしたからね。82年のセレンソンのCFですよ。全然点が取れなくて、彼のせいで黄金のカルテットが輝けなかったっていう当事者なんだけどね（笑）」

高校卒業後、単身南米へと渡った屋良充紀は、テスト生として12のクラブを渡り歩いてきた。気付けてみれば、渡伯して2年が過ぎようとしている。そろそろ腰を落ち着けてサッカーがしたい、そんなときに出会ったのがセルジーニヨであり、78年のセレンソン主将を務めたルイス・ペレイラだった。

「テスト生として行ったクラブにルイス・ペレイラがいたんです。クラブを渡り歩いているんだと話したら、「そんなことをしていたら試合には出られ

ない」と言われて、彼の紹介でサントアンドレイ（サンパウロ州一部）のテストを受けて入団が決まりました」

ガリンシャのドリブルに衝撃を受け、リベリーノのボールコントロールに魅了された青年が、ついに南米でプロキャリアをスタートさせた。

日本人プレーヤーが海外に活躍の場を求めるのは、いまでこそ当たり前のように行なわれていることだが、屋良がブラジルでプロ契約を果たしたのは92年のことだ。まだJリーグが産声を上げる前である。日本人サッカーが下手な選手の代名詞、といわれていた南米で、本場にサッカーを仕事にできるのかと不安に思うこともあっただろう。しかし、屋良は持ち前のポジティブな性格を生かしてブラジルの生活にもスムーズに溶け込んでいった。オフの日の公園に行けば、暇をもてあましたオヤジや子どもたちとストリートサッカーに興じていた。

「向こうの子どもたちとは仲良くなりましたね。ちゃんとしたボールなんて蹴ったことがないから、僕がボールを持っていくと集まってくるんですよ」

ブラジルでの街の子どもたちとのつながり。この経験が屋良の指導方針、そして人間性の根幹に息づいている。

**指導者のキッカケは地域から
原点を伝えるというスタンス**

屋良が指導者としての第1歩を踏み出したのは93年だった。日本に一時帰国した際に、南米帰りだということも手伝って、近所の子どもたちにサッカーを教えて欲しいという依頼を受けた。友人を交えて、軽い気持ちで始めたスクールだったが、回を重ねることに子どもたちは増え、いつしか大きな輪となっていた。大人と子どもが混ざ



「教えるのではなく伝える」それが屋良のスタンスだ

り合ってサッカーを楽しむ。指導者というよりは、ともに遊んでいたと言ったほうが近いのかもしれない。教えるのではなく伝える。いまでも屋良のスタンスはこの頃と変わらない。

その後、エクアドル、コロンビアとプロとしてのキャリアを重ねたのちに、横浜FC泉ジュニアユース監督の話が舞い込んできた。横浜FCがJリーグに加盟した00年のことだ。Jリーグ加盟と同時に立ち上げられた泉ジュニアユースの監督に就任したのは、奥寺GMの誘いがあったからだと言う。「君の好きなようにやってほしい」と奥寺を含む関係者たちの後押しを受け、屋良監督率いる泉ジュニアユースはゼロからのスタートを切った。屋良は当時をこう振り返る。

「なにもない状態からの見切り発車でしたね。その辺は僕にびったりだったんですけども（笑）」

泉ジュニアユースの練習は、ゲーム形式によるものが多い。紅白戦、ミニゲームなど、とにかく実戦のなかで経験を積ませる。そのときの状況もまた特徴がある。試合を見ている選手がいないのだ。選手たちはそこかしこにゴールをつくり、ミニゲームを行なう。

南米自由な指導者の 自白

通常の中学などであれば、試合に出場しない選手たちは整列して試合を見ている状況だ。「見る時間があつたら、ゲームをしたほうがいい。選手たちはプレーするためにここに来てるんだから」。まさに南米流。しかもミニゲームのコンセプトが、丁寧にパスをつなげといった一般的なものではなく、「遊び心を持って」なのだから面白い。「育成年代ではガチガチに固めるより自由によらせて、サッカーの面白さを伝えるほうが大事なんです」と言うのだ。



PROFILE
 屋良充紀 ● やら・みつとし。1970年生まれ。神奈川県出身。高校時代は、全日空サッカークラブでプレー。その後、ブラジルへ留学し、92年にブラジル・サンパウロ州1部リーグのサントアンドレイに入団。エクアドル、コロンビアとプロ生活をつづけ、99年にコロニア1部リーグのインデペンディエンテ・サンタフェオアスタのプレフベニール（15～17歳のチーム）でアシスタントコーチを務める。00年の横浜FC立ち上げと同時に、泉ジュニアユースの監督に就任して現在に至る。ブラジルサッカー連盟・サンパウロサッカー協会公認指導者ライセンス、コロンビア・アンチオキア協会公認指導者ライセンス、日本サッカー協会公認指導者ライセンス、チンゴレイセンス、日本サッカー協会公認指導者ライセンス、チンゴレイセンスを持つ。

南米のコーチたちがそうしたように、屋良は紅白戦などでも選手たちに混じってプレーをする。そのなかで、ヒールリフト、ラポーナといったボール扱いの面白さを見せることで、サッカーの楽しさを分かりやすく伝える。

「僕のプレーを見て面白いと思えば真似すればいい。面白いプレーを見せれば、教えなくても次の日の練習前にはそればかりやってるんですよ」

選手育成という意味では、曲芸まがいのプレーは必要ないのかもしれない。しかし、遊びのない窮屈なサッカーなどプレーしていて面白いだろうか。ちよっとしたアクセントを加えることで、サッカーの面白さは何倍にも広がるのだから。これこそ屋良の指導方針の魅力と言えるだろう。

「対戦相手の監督さんにも言われるんです。「中盤は面白いけど、そこから前に出ないよね」って。でも、僕は全然かまわないし、それを分かってくれ

てるんならそれでいい」
 たしかに選手たちにはその指導方針がしっかりと打ち出されている。足元の技術はしっかりと持っているし、周囲の状況を読む力にも長けている。これは、紅白戦に参加する監督のプレーを見て、中盤の選手に必要な技術を盗み取っているからに他ならない。

競争意識を持つことで 精神面の成長が促される

育成という難しい現場にあつて、屋良がもっとも力点を置いているのは精神面だ。ジュニアユースに所属する選手のほとんどはプロになるためにサッカーをしている。しかし、この年代では精神的に成熟するのは難しく、やはりチーム内でもメンタル面の成長にはばらつきを生じるといふ。

そこで屋良は、「サッカーをするときは、5歳くらい精神年齢を上げてくれ。サッカーは子どもじゃできないから」と繰り返し選手たちに伝えている。精神年齢を上げるというのは、プロとしての考えを持って自らの責任でアクションを起こすということ。ただ与えられるのを待つのではなく、自主性を持ってサッカーに取り組んで欲しいという願いが込められている。



「精神的に難しい年代である選手たちのコミュニケーションが信頼の基盤を作る」
 試合のなかで選手たちは伸びやかに成長する

コロンビアのサンタフェでプロフベニール（15～17歳のチーム）のアシスタントコーチを務めていたとき、南米の選手たちはすでにプロの考え方を身に付けていたという。サッカーさえうまくいけば生活が豊かになる。そういったハングリー精神がバックグラウンドにあることは言うまでもないが、その差を埋めない限り世界には通用しない。では、どうやって差を埋めるのか。

屋良は入団してくる選手たちに、競争を楽しむことを求める。「ピッチの外では仲良しでもいいけど、ピッチのなかではみんなライバル。紅白戦でも削ってもいいからガンガン行けと言っています」。競争心を養うことで、選手たちにプロのメンタリティーを植え付けていく。屋良の指導によって選手たちは自我を示し始めている。「3年生の意識の高い子は俺が指示を出してもそれに対して意思表示をしますから

ね」。日本の子どもたちが苦手とする意思表示が、泉ジュニアユースの選手たちには根付いているのだ。

創設から4年目とまだ歴史の浅い泉ジュニアユースだが、巣立った選手たちは確実に活躍の場を得ている。卒業生の最年長が高校2年に当たるといふ、いまだトップに昇格した選手はいないが、ユースにはふたりの選手が進み、札幌の明星学園や東京学館といった名門高校にも選手を送り込んでいく。

奔放な南米が育てた自由な指導者。その独自のスタイルは、はた目から見れば異端だと受け止められるかもしれない。しかし、その指導法は自身の経験に裏打ちされたたしかなものであり、選手たちや関係者からの信頼は厚い。今後、屋良充紀はどんな選手を育てていくのだろうか。泉ジュニアユースの活動を楽しみに見守りたい。

（文中敬称略）